

児童期の自然遊びが大学生の自己同一性に及ぼす影響

小松 周平（生涯スポーツ学科 野外スポーツコース）

指導教員 黒澤 毅

キーワード：児童期、自然遊び、大学生、自己同一性

1. 序論

近年、子どもが生きるために必要となる経験が不足しており¹⁾、遊び場の環境や生活スタイルの変化がその影響であると考えられている。遊びは子どもの象徴であり、遊びの減少は子どもを取り巻く諸問題と深く関係している。児童期（6歳～12歳）は、遊びの体験の多くが感動体験として残される。その体験は20歳前後における人格形成期に影響を与えていると考えられている。つまり、児童期の経験が「～であるからこそ、私である」という自己同一性の感覚の形成に関係があると考えられる。

そこで、本研究では大学生の児童期の自然遊び経験に着目し、自己同一性への影響を明らかにし、自然遊びの重要性について検討することを目的とする。そこで以下の課題を設定した。1) 大学生の児童期の自然遊びについて明らかにする。2) 大学生の自己同一性について明らかにする。3) 遊びの違いが自己同一性に及ぼす影響について明らかにする。

2. 研究方法

【被検者】K市にあるK大学1年生から4年生、計73名を対象とした。（表1）

表1. 被検者の属性

	1年	2年	3年	4年	合計
男子	3	5	25	3	36
女子	17	9	8	3	37
	20	14	33	6	73

【調査用紙】自己同一性地位の判定には、加藤²⁾が開発した自己同一性地位判定尺度（3因子12項目）を用いた。尺度は、「全然そうではない」～「まったくそのとおりだ」までの6段階で評定を行い、順に1から6の番号が付けられ、回答番号をそのまま得点化して評価を行なった。児童期の遊びについては、筆者が独自に作成した調査用紙を用いた。

3. 結果と考察

1) 児童期の自然遊び

子どもの頃に育った環境の割合は、「都市部にある」（22%）、「どちらかといえば都市部にある」（41%）、「どちらかといえば自然豊かな場所にある」（25%）、「とても自然豊かな場所にある」（12%）であった。

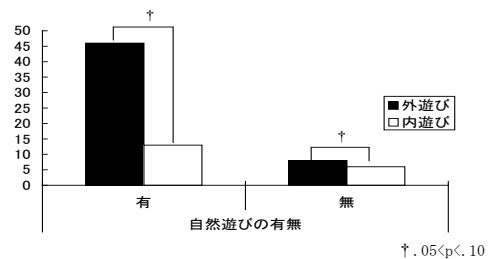
また、子どもの頃に育った環境が自然豊かであるほど、自然遊びをしていることが明らかになった。また、遊びの種類と自然遊びの有無においてカイ2乗検定を行い、遊びの違いと自然

遊びに有意な傾向（ $\chi^2=2.797$, $df=1$, $.05 < p < .10$ ）がみられた。（表2）、（図1）

表2. 遊びの種類と自然遊びの有無のクロス集計結果

	自然遊びの有無		合計(N)	結果
	有	無		
外遊び	46	8	54	2.797 †
内遊び	13	6	19	
合計(N)	59	14	73	

†. 05 < p < .10



†. 05 < p < .10

図1. 遊びの種類と自然遊びの有無におけるカイ2乗検定結果

外遊びが多かった者のうち、その遊びの内容は自然の中で行った経験が多かった割合が高かった。外遊びは自然に出向くことが多く、自由記述からも「川遊び」、「山や川で生物、植物に触れた」、「木登り」といった内容がみられた。

2) 大学生の自己同一性

自己同一性地位判定の結果により、D-M中間群が最も多い結果となった。その要因として、大学生の多くがこの群に該当していることや同一性達成の判断基準となる同一性得点が低い値であったことが考えられる。

3) 遊びの違いが自己同一性に及ぼす影響

同一性得点と遊びの違いには有意な差は認められなかった。しかし、遊びの違いにおいて、外遊びをしていた人が内遊びをしていた人よりも同一性得点が上回ったため、外遊びをしている人の自己同一性の形成に少なからず影響があると考えられる。

4. まとめ

1) 児童期に育った環境が自然に恵まれている学生は、自然遊びをしていることが明らかになった。

2) 児童期における自然遊びと大学生の自己同一性に有意な差はみられなかった。

3) 児童期の遊びの違いと自己同一性に有意な差はみられなかった。

5. 参考文献

- 1) 丸山 憲 飯田 稔 (2003) 子ども時代の自然遊びが大学生の自然に対する感性に及ぼす影響 日本野外教育学会第6回大会プログラム・研究抄録集
- 2) 加藤 厚 (1983) 「大学生における自己同一性の諸相とその構造」教育心理学研究 31 巻4号